

■ 特集「結い」

NPO環の会における「親子結び」

富 田 庸 子

(鎌倉女子大学児童学部児童学科)

はじめに

しっかりつかむ しっかりつかむ
まことの知恵を しっかりつかむ
困ったときは 手を出して
ともだちの手を しっかりつかむ
手と手をつないで しっかり生きる

～釜石小学校校歌（作詞：井上ひさし）より～

2011年3月11日。釜石小学校（岩手県釜石市）の子どもたちは、大津波が迫りくる中、大人たちの指示がなくても迅速に避難し、自分の命だけではなく幼い者、弱い者の命を守り、ひとりの犠牲者もなく生き抜いた。後に「釜石の奇跡」と呼ばれる子どもたちの行動は、校名などが全く登場しない一風変わった校歌にも謳われているように、先人の培った知恵をつかみ手と手を結びあうことこそが、生きていく道を拓き得ることを改めて教えてくれた。

東日本大震災による震災孤児は240人にのぼっている（厚生労働省2011年10月発表）。このうち、扶養義務がある親族に引き取られた子どもは91人（約38%）で、149人は知人（扶養義務のない親族も含む）に引き取られるなどしたという。阪神・淡路大震災での親族引き取り率（約88%）と比べても、被害の甚大さを痛感する。震災後、児童相談所への問い合わせや里親登録希望者も増えたといわれるが、現代の日本には、産みの親と暮らすことのできない子どもたちの育ちを支えるための十分な土壌があるとはいえない。

「産むこと」と「育てること」

日本では今、不妊治療がますます盛んになる一方で、産みの親と暮らせない子どもの多くが施設で育っている。厚生労働省（2012）によると、2011年3月末現在、社会的養護を必要とする子どもは約45,000人とされるが、その内、

児童養護施設と乳児院に計32,077人が入所しており、里親家庭やファミリーホームで養育されている子どもは4,373人と1割にも満たない。子どもを産み育てている父母64組に対して行った筆者らの調査（Kosawa&Tomita, 1999）でも、「日本人にとって幼い子どもを迎える養子縁組は受け入れにくく、子どもが肩身の狭い思いをして育つことになる。育て親は素晴らしいが、もし自分に子どもが生まれなくても養子は決して迎えない」といった考え方への賛同傾向を見出した。

わが国で養子縁組や里親といった制度が活性化しない理由は、宗教的背景が乏しいことに加えて、家族の絆として「血縁」を重視し、「産む」と「育てる」ことの強力な一体化があると思われる。「子どもを育てる義務を果たせない母親は産むべきではない」という社会規範が強く、予期せぬ妊娠の責任を取る方法として、子どもの命を守る養子縁組などよりも人工妊娠中絶が想定されているといえるだろう。実際、2010年度の中絶件数は21万件を超えている（厚生労働省, 2011）。

はたして、「産むこと」と「育てること」とは、切り離せないものであろうか。血縁が親子の心の絆を保証するものではないことは、深刻化する虐待などの悲しい現実によってすでに証明されている。「産むこと」と「育てること」とは無条件につながり得るわけではない — 私たちは、この現実を直視し、親子という関係のとらえ方を柔軟にする必要があるのではないだろうか。

NPO環の会

東京に事務局を置くNPO環の会は、1991年の設立以来、予期しない妊娠や出産で悩む人からの相談を受け、産みの親がどうしても育てられない場合に、「子どものため」を最優先にした養子縁組を支援している。筆者は、環の会を通して結ばれていく家族の絆にひかれ、もう15年余り関わらせていただいている。

環の会で育て親になろうとする夫婦は、「選ばないことを選ぶ」必要がある。子どもの年齢や性別、健康状態、性格など、「こんな子どもが欲しい、欲しくない」といった条件をつけることは一切できず、子どものありのまますべてを受け入れることが求められるのである。産みの親は、子どもの命を守り、その幸せを願って環の会に辿り着いた存在として尊重され、育て親を決めるプロセスにも関わっていく。縁組成立後は、産みの親、育て親、子ども、それぞれのニーズに沿って、環の会事務局を通じた交流が保たれる。環の会の仲立ちによって育て親となった夫婦は、2011年12月末現在で163組、迎えられた子どもは258人となった。

古澤・富田（2004）は、子どもを迎え育てている環の会の育て親夫婦の幸福感が、子どもを迎える前に比べて明らかに増大していることを見出した。また、育て親たちが、子どもをひとりの人間として尊重し、「産みの親がいてこ

そ子どもがいて、今の自分たち家族がある」という認識を強く持ち、産みの親の存在を受け入れることが子どものありのまますべてを受け入れる大前提であると考えていることを示している。かつては「産めない」ことに苦しみ、エリクソンのいう停滞（stagnation）の危機にあった夫婦が、自分たちには「産めなかった」ことや産みの親の存在も含め、すべてを受け入れて子どもを迎え育てる人生を選び取り、人格的活力（virtue）としての世話（care）を培って、世代継承性（generativity）を発揮していくのである。

テリング

環の会の縁組プロセスは産みの親側の相談から始まるため、迎えられる子どもの多くは、生後間もない新生児や乳児である。子どもの出自を知る権利を守り、親子の信頼関係を築いていくために、環の会では「テリング（tell + ing）」を大切にしている。テリングとは、育て親が産みの親の存在や子どもの出自にかかわることがらを、日常生活の中で子どもの発達に応じて伝え続けて、子どもの理解を形成し、また、子どもの思いに耳を傾け続けることとされている（環の会, 2008）。

テリングは、子どもを迎えた時から始まる。育て親たちは、テリングを通じて子どもに、産みの親が別に存在しているという事実を伝えるだけではなく、産みの親、育て親をはじめ、子どもに関わる人たちの思いを伝えたいと考えている。そして、先輩の育て親や環の会スタッフのアドバイスを取り入れながら、それぞれの子どもや家族の状況に合わせたテリングを工夫している（環の会, 2008）。

富田（2011）は、環の会を通じて迎えられた男児へのテリングに関する育て親の語りを分析した。生後3か月で迎えられた男児が6歳8か月になるまでのデータから、男児が「産みの親が育て親とは別に存在する」ことを理解していくプロセスの探究を試みたものである。そこでは、(1)子どもの発達に伴って、テリングが育て親からの一方向的なものから親子間の双方向的なものへと変化していくこと、(2)弟や妹を迎えるという経験が、産みの母親の存在や自分自身が育て親のもとに迎えられたことについての理解を深める重要な機会となること、(3)産みの母親が育て親とは別に存在することがわかって、それが他者とは異なる状況であると気づいているわけではないこと、(4)子どもが周囲との違いに気づき始めることによりテリングに関わる態度が複雑化していくことから、子どもの中に不安や葛藤が芽生えていると推察されること、(5)子どもが産みの父親の存在に気づく時期は産みの母親についての気づきよりも遅れること、などが明らかになった。今後は、テリングを通じて子どもが、迎えられた事実だけではなく、自分に関わる人たちの「思い」をいつどのように理解していくのかについて、検討を進める予定である。

おわりに

テリングは、子どもの誕生を否定せず、「あなたがいてくれるだけでうれしい」と伝え続けていくいとなみである。それは、育て親家族に限らず、どのような親子関係においても大切なことではないだろうか。

血縁という絆がないからこそ、結べる絆がある。縁組によって子どもの命と育ちが守られていく。そしてその絆はもちろん、家族の中だけにとどまらない。東日本大震災の際にも、環の会では、全国各地の育て親家族から、被災した家族や産みの親に対して、粉ミルクやおむつ、飲料水、食料品、日用品などが励ましのメッセージとともに届けられた。私たちの社会は、もはや、血縁・非血縁いずれの親子・家族も、それを取り巻く非血縁性の社会の中で支え合いながら暮らしている。家族の中の非血縁性を明確に自覚した上で受け入れていこうとする育て親家族の姿は、他者との垣根を低くして、多様な存在を認め合い、ひとりひとりを大切にしながらつながり合おうとする世界の豊かさを教えてくれる。

参考文献

厚生労働省 2011 平成22年度衛生行政報告例

厚生労働省 2012 社会的養護の現状について（参考資料）

Kosawa,Y.,&Tomita,Y. 1999 Biological parents' attitudes toward adoption and alternative fertilization techniques. Science Reports of Tokyo Women's Christian University, 50(3), 1623-1631.

富田庸子・古澤頼雄 2004 Open Adoption家族における育て親の態度：子ども・子育て観と夫婦関係 中京大学心理学研究科・心理学部紀要、3(2), 37-51.

富田庸子 2011 育て親家族におけるテリングの効果についての探索的検討 鎌倉女子大学紀要、18、27-38.

環の会 2008 環の会が提唱している「テリング」に関する検討と提言. 独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業報告書.